2011 年 10 月 31 日発行

点訳通信

72号

情報文化センター　点字製作係

〒550-0002　大阪市西区江戸堀 1-13-2-8F
TEL 06-6441-1028（点字製作直通）
TEL 06-6441-0015(代表)　FAX 06-6441-0095

今年は自然災害に見舞われる年になってしまい、各地に災害の爪痕が残りました。2011 年もわずかとなりましたが、平穏な年末を迎えられることを祈っています。

個人的には、先日タンデム自転車に初めて乗りました。話はよく聞いていましたが、それほど自転車に関心がなかったので、これまで体験したことがありませんでした。ところが、この秋の日本ライトハウス展がきっかけで乗ってみたところ、非常に爽快で楽しく、ふだん味わえない「風」を感じることができました。好奇心を大事にして、来年も様々なことに「チャレンジ」したいと思います。（奥野）

(C)WANPUG

【 点字製作係の年末年始の活動について 】

ボランティア活動終了日：１２月２７日（火）

ボランティア活動開始日：　１月　６日（金）

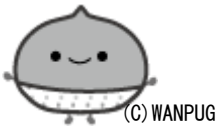
＊全館の休館は１２月２９日（木）～１月４日（水）です。

目次

◆「校正勉強会」報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
◆ 文脈で読みが違う漢字・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
◆ 画集も読みたい！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
◆ 表記辞典（増補版）が完成しました・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
◆「教科書点訳連絡会」セミナーのご案内・・・・・・・・・・・・・・・１２

「校正勉強会」報告

読みやすい図書の点訳をめざして



点字製作係主任　奥野真里（おくのまり）

７～８月にかけて、全４回の校正勉強会を行いました。参加者は４５名で、会議室１・２を開放して実施しました。

今回は、校正の取り組み方と読み方の調査を中心に取り上げ、校正をする上で注意すべき点は何かを検討しました。

◇校正勉強会の内容◇

勉強会を始める前に、今回の目的は校正技術を磨くことではないとお断りしました。校正をする上で必要なポイントをおさえ、皆さまとの情報交換から得た校正のコツを吸収してほしい。そして、日頃の校正に役立てていただきたいとお話ししました。

大まかな内容として、

第１回目は、「調査表」の使い方、調査方法について

第２回目は、誤字脱字、記号類の校正

第３回目は、レイアウトの校正。「調査表」、「校正表」の検討

第４回目は、表紙、目次、奥付の校正

を、取り上げました。

毎回、内容に即した点訳例と原本と照合させ校正してくるという宿題があり、それをたたき台にして様々な意見を交わしました。

◇調査にあたっての注意点◇

点訳を行う前には、調査（下調べ）を入念に行わなければなりません。第１回目の「調査」では、具体的に、どのように調査をすればいいのか。地名・人名を調べる場合に便利な辞書を紹介し、インターネットを活用する場合の注意点に触れました。また、調査した結果を記入するための「調査表」の使い方を検討しました。

ふだんの読書では文字を軽く読み流しがちですが、点訳にあたってはあいまいなままではすまされません。「この読み方でいいのだろうか」、「何と読むのだろう」と思ったら辞書などで即座に調べましょう。また、調査を行ったらその内容をしっかりと記録して校正者に伝えてください。その際、出典先を必ず明記してください。そうすれば、点訳者が行った処理内容が校正者にスムーズに伝わり、校正者が再び同じ調査

をする必要がなくなります。それはまた良質な点字図書を速く製作することにもつながります。

なお、勉強会では「点訳通信 59 号」で掲載している「㊥」や「？」、「◎」の記号の書き込み方についても触れました。

◇校正のポイント◇

校正では、誤字脱字を見つけること、人名・地名を始めとする漢字の読みの確認、分かち書きの正誤、点字で読みやすいレイアウトの検討など、注意すべき点が多くあります。あらゆる面を考慮しながら校正するためには、経験を重ね、感覚を養うことが必要です。

また、校正をしていて、いつもはっきりと答えを出せるとは限りません。例えば、分かち書きを考えるときに、拍数で機械的に判断できる場合もあれば、点字の規則では明確にされておらず、判断が困難な場合もあります。

読む人によって文脈の捉え方や意味の解釈が違うのですから、点訳の処理の仕方にも違いが生じます。はっきりとした答えが出せない例が多いのも当然です。そのような場合、どこまでを許容範囲にすればよいのか、校正で指摘すべきかどうか、判断に迷うことも多いでしょう。このように、校正は臨機応変に取り組むことが求められます。

勉強会で皆さまから発言していただいた点訳・校正に関する内容をご紹介します。

（１）迷ったときは、一人で悩まずに周りのボランティアや職員に相談する。

（２）読み方が幾通りかある言葉は、文脈に応じて選ぶようにする。１冊の図書の中で統一させることも大事だが、文学作品など弾力的に文脈に応じて読み分けることも大切。

（３）あえて読み方の使い分けを行ったり特別な読み方を採用した場合などは、そのことを校正者に伝える。

◇「調査表」の使い方◇

昨年作成した「調査表」を定着させるために、今回の勉強会で見直したところ、以下のような問題点があげられました。

「「調査表」に、点訳者と校正者がそれぞれ何を書き込めばいいのかわからない」

「記入欄が小さくて書ききれない」

「データでも表を作成できるようにしてほしい」

これらの意見を踏まえて、「調査表」を手直ししました。

まず、前回の「調査表」では調査内容と校正内容を一度に確認できるように１枚の表にまとめましたが、改定後は、「調査表」と「校正表」に分け、それぞれ次のように活用して行くことになりました。

「調査表」：点訳者が、「調査した内容（漢字の読み、分かち書きなど)」、「点訳する上で、特別に処理した点」、「校正者に伝えたい内容」を書き込む。

「校正表」：校正者が、「点訳内容を見て疑問に思ったこと」、「指摘内容」を書き込む。ただし、点字表記の指摘については、墨点字プリントなども併用して分かりやすく伝える。

＊これらの表は、必ず原本に挟んで完成するまで添付しておいてください。

＊　＊　＊

校正は点訳とまったく別の作業だと思っていませんか。とかく、「点訳」というと入力のことと思われがちですが、入力から校正までひっくるめて「点訳」なのです。

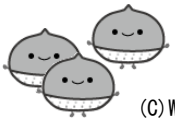
３人の人が同じ図書を校正しても、少しずつ３人の校正内容は違います。一人ひとりの感覚や考え方が違うのですから、指摘する内容が違ってもおかしくはありません。ですから、皆さまが校正をしていて不明だと思われる点や、納得できないことがある場合は、遠慮なく校正表にあげるようにしましょう。点訳者や他の校正者に気を遣うことなく、率直な意見を出してください。

また、他の人に校正してもらう前に自分自身が点訳したものを読み返すことも、大切な点訳作業の一つです。入力が完了し校正に出す前に、見直しするのも忘れずに。

この一連の作業を通して、今後もよい点字図書を着実に製作（点訳）していきましょう。

(C)WANPUG

〔保存版〕文脈で読みが違う漢字



文脈によって読みが異なる漢字を紹介します。うっかりすると間違えやすい漢字です。点訳する際は文意をよく考え、正しく読んでください。

●足跡

あしあと：人や動物の歩いたあとに残る足の形。歩いて行った道筋、経路　（→足跡を追う）

そくせき：成し遂げた成果、業績（→物理学の発展に大きな足跡を残す）

●頭

あたま　（普通の読み方）　（→頭が上がらない、頭が痛い）

かしら　（→尾頭つき、八歳を頭に三人の子持ち、大工頭、獅子頭）

こうべ　（→頭を垂れる）

ず　（→頭が高い）

●一時

いちじ：時刻。しばらくの間。過去のある時。その時だけ。一回、一度　（→出発を一時見合わせる。一時はだめかと思った。一時の気の迷い。一時払い）

いっとき：昔の時間の単位（２時間）。［やや文語的］わずかな時間、しばらくの間（→花の盛りも一時、一時小雨になった、聞くは一時の恥聞かぬは末代の恥）

ひととき：しばらくの間　（→楽しい一時を過ごす、憩いの一時）

＊「一時に」は「いちどきに」とも読む

●上手

うわて：他よりまさっていること、高飛車なこと。相撲の取り手　（→役者が一枚上手だ。上手に出る。上手投げ）

かみて：上座に近い方、川の上流の方、舞台の客席から見て右側

じょうず：巧みで手際のよいこと、そのさまやその人

＊「上手い」は「うまい」

●晩生

おくて：普通より遅く開花したり実が成熟する草木

ばんせい：おそく生まれること。農作物などが普通よりおくれて成熟すること　（→晩生種）

●悪心

あくしん：悪事をしようとする考え

おしん：むかむかして吐き気を催す感じ

●造作

ぞうさ：手間や費用のかかること、めんどう　（→なんの造作もない、造作を掛ける、無造作）

ぞうさく：つくること。家を建てること、その家。建築内部の仕上げ材や取り付け材の総称。顔の目や鼻のつくり　（→離れを造作する。造作に凝る。造作の大きい派手な顔）

●体

からだ：（普通の読み方）

たい：身体。一定の内容と形式をそなえて現れるかたち。物事の本質をなすもの（→体を預けて寄り切る、体を開いてはたく、体をかわす。論文としての体を整える、文章の体をなしていない。名は体を表す）

てい：外から見た物事のありさま、ようす。見せかけ、体裁。（名詞などの後に付いて）そのようなもの、そのようなようすなどの意を表す　（→満足の体、そしらぬ体、這(ほ)う這(ほ)うの体。体のいい返事。職人体の男）

●情緒

じょうしょ：「じょうちょ」と同義（昭和20年代くらいまでは一般的な読み方。その時代までの文学書や心理学の古い本ではこの読み方が普通）

じょうちょ：事に触れて起こるさまざまの微妙な感情、その感情を起こさせる特殊な雰囲気。［心理］急激で一時的な恐怖・驚き・怒り・悲しみ・喜びなどの感情、エモーション　（→情緒豊かな作品、異国情緒。情緒不安定、情緒障害）

●開ける

あける　（→窓を開ける、封を開ける、目を開ける、店を開ける）

はだける：衣服の襟元や裾などを広げる、それらが乱れてひらく　（→胸を開ける、裾が開ける）

ひらける　（→急に道が開ける、眺望が開ける、文明が開ける、運命が開ける、開けた地域）

●空く

あく：中身が消費されて容器がからになる。部屋・建物・土地・座席などを占めていた人や物がなくなり空間や余地ができる。穴・空間・間隔などが生ずる。欠員が生ずる。使用中だった物が用が済んで使われなくなる。仕事が終わって暇になりゆとりができる　（→グラスが空く。今会議室は空いていない、席が空いている。道路に穴が空いた、電車とホームの間が広く空いている、行間が空き過ぎている。課長のポストが空く。その電卓空いたら貸してください。体が空く、手が空く）

すく：ある空間を満たしていた人や物が少なくなってあきができる、まばらになる。空腹になる。つかえていたものがなくなりすっとする、心がはれる。当面することがなく暇ができる　（→がらがらに空いた電車、道路が空いている。腹が空く。胸の空く思い。手が空いたら手伝ってくれ）

＊「手が空く」は「てがあく」「てがすく」どちらの読みでもよい。

●怒る

いかる：腹を立てる、憤慨する（抽象的なことにも使う。やや文章語的）。荒れ狂う。角張ってごつごつしている　（→烈火のごとく怒る、政界汚職に怒る。波が怒る。怒った肩）

おこる：腹を立てる（我慢できない気持を外に表す）。よくない言動を強くとがめる、しかる　（→真っ赤になって怒る。先生に怒られる）

＊怒り

いかり　→怒りがこみあげる、怒り狂う、世間の怒りを買う、怒り心頭に発す

おこり　→怒り出す、怒りっぽい、怒りん坊、怒り上戸

●誘う

いざなう：［雅語的］　（→文学の世界へ誘う）

さそう　（→悪の道に誘う、笑いを誘う）

●埋める

うずめる：物に覆われて外から見えない状態にする　（→マフラーに首を埋める、恋人の胸に顔を埋める、骨を埋める）

うずめる、うめる：穴などに物を入れ上に何かをかぶせて見えなくする。人や物である場所をいっぱいにする　（→金塊を埋める、壺を庭に埋める、火種を灰に埋める。観衆が会場を埋めた、バックを花で埋める）

うめる：くぼんでいるところに物を詰めてくぼみをなくす。不足や損失を補う。水などを加えて温度を下げたり濃度を薄めに整えたりする　（→外堀を埋める。赤字を埋める、欠員を埋める、空白を埋める。風呂を埋める）

●点す

さす：ごく少量の液体をある部分にそそぎ入れる　（→目薬を点す、歯車に油を点す）

ともす：あかりをつける　（→ろうそくを点す、爪に火を点す）

●注ぐ

そそぐ：流れ込む、流し込む。降りかかる、降りかける。心・力などをそのほうに向ける　（→降り注ぐ光。愛情を注ぐ）

つぐ：容器に物を満たす。特に液体を容器にそそぎ入れる　（→御飯を注ぐ、お茶を注ぐ、注ぎ足す）

●汚す

けがす：清らかなものや美しいものをきたなくする。女性を辱める。名誉や名声に傷をつける。分に過ぎた地位につく（謙遜した言い方）　（聖地を汚す。身を汚される。名を汚す。末席を汚す）

よごす：きたなくする。不正なことなどをする。あえものをする　（→水を汚す。手を汚す。ごまで汚す）

＊「汚れる」は「けがれる」「よごれる」、「汚らわしい」は「けがらわしい」、「汚らしい」は「きたならしい」、「汚そう」は「よごそう」「けがそう」「きたなそう」

●蝦夷

えぞ：日本列島の東方・北方に住み日本人によって異族視されていた人々に対する呼称。

えみし：「えぞ」の古称（平安時代前半までの読み方）

●大君

おおいぎみ：貴人の長女の尊称（二女は「中の君」、以下「三の君」「四の君」などという）

おおきみ：天皇、親王・諸王、皇女・女王などにたいする敬称。主君の敬称

たいくん：君主の尊称。とくに江戸時代に外国に対して用いた徳川将軍の称

●声明

しょうみょう：［仏教］文字・音韻・語法などを研究する学問。（日本では）法会のさい僧によって唱えられる声楽

せいめい：意見や意思を世間に対して発表すること、その意見　（→声明文を発表する、共同声明）

●落書

らくがき：書くべきでないところに文字や絵などをいたずら書きすること、その書いたもの　（塀に落書する）

らくしょ：政治や社会や人物などを批判・風刺した匿名の文書、おとしぶみ　（→二条河原落書）

●礼拝

らいはい：仏教で神仏を拝むこと

れいはい：キリスト教などで神を拝むこと

●役所

やくしょ：役人が公務を取り扱う所

やくどころ：その人にふさわしい役目、与えられた役目　（→役所をわきまえた人）

●六部

りくぶ：中国の六つの中央行政官庁

ろくぶ：「六十六部」の略

（六十六部：法華経を 66 回書写して一部ずつを 66 か所の霊場に納めて歩いた巡礼者。江戸時代に仏像を入れた厨子を背負って鉦や鈴を鳴らして米銭を請い歩いた者）

●末期

まっき：ある物事の終わりの時期　（→戦争の末期、平安末期）

まつご：一生の終わりの時、死に際　（→末期の言葉、末期の水、末期養子）

●御手洗

おてあらい：トイレの美称

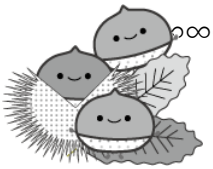
みたらい：人名、地名

みたらし：神仏を拝む前に参拝者が手や口を洗い清める所。「御手洗会（みたらしえ）」「御手洗川」の略

(C)WANPUG

〔てんじの　はなし〕

画集も読みたい！



(C)WANPUG

点字製作係　小原二三夫（おばらふみお）

今回は、一読者としての立場から、「こんな点字書があったらいいのになあ」という視点で書いてみます。

私は若い頃（もう 40 年以上前ですが）物理や宇宙の話に興味をもつようになり、なんとかして、その関係の本を読もうとしました。ライトハウスもふくめ、全国の有名な点字図書館数箇所の目録を見て、関係のありそうな本を片っ端から読みましたが、1 年くらいでもう読む本はなくなってしまいました。読んだ本もほとんどが入門的なものばかりで、数式を使って詳しく説明したような本は皆無でした。なんとも物足りなく、空虚感におそわれたことを覚えています。

現在は数式の点訳方法がほぼ定められ、また図についてもそれなりに点訳できるようになって、だいぶ状況は改善されました。

私がもうひとつ、若い頃からなんとなく憧れていたのは、絵です。何度か、知り合いの描いた油絵を触りながら説明してもらったりもしました（もちろん油絵を直接触ってもたいして分からないのですが）。だいぶ後になってからですが、美術館に行って絵を言葉で説明してもらうこともありました。しかし、言葉による説明だけでは私にとっては実感としては何の手掛りもないような感じですし、いつも相手の言うことだけを聞いているだけで、自分で絵を楽しむという風にはなりませんでした。

10 年ほど前からは、所蔵作品のうち数点の絵について、触っても分かる浮出しの図録を製作する美術館も現われはじめました。ただ、そのような試みをしているのは、岐阜、三重、山梨の各県立美術館と栃木県の宇都宮美術館くらいで、まだまだ少ないです。

情報文化センターでは、数年前『すぐわかる画家別西洋絵画の見かた』（岡部昌幸著、東京美術）をボランティア有志で点訳しました。50 人の画家について各 1 点ずつ紹介されているのですが、それぞれの絵について点訳者がだいたい点字 1 ページ分をめどに説明文を作り、また、輪郭もはっきりしていて構図も単純な絵について、10 点ほど点図にしてみました。私はこの本の校正をさせてもらいましたが、私としては初めて西洋絵画史の一端にふれる思いでした。

絵を触って理解するためには、線中心の点図だけではやはり不十分で、面的に浮出した“さわる絵”が望ましいです。現在、彫刻家の柳澤飛鳥さんの製作した名画の原

版を基に、紙にその絵の輪郭を浮出させ、それに点字の解説も付けて画集を作るという企画が、日本点字図書館の協力を得て進行中です。

写真集、画集、図鑑、図録といったものは、これまでは点訳書として選ばれることはほとんどありませんでした。しかし、それらの中にも、ごくたまにですが、本文だけでも十分に内容が判り、写真などの説明をほとんど加えなくても良いものもあります。また、点訳者が説明文を加えたり、あるいは説明文とともに簡単な点図を添えるなど、それなりに工夫すれば、かなりよく内容を理解できると思われる本もあります。

9 月から 10 月にかけて、第 24 回専門点訳講習会「写真・図表コース」を開催しました。この講習会をきっかけにして、これまで敬遠されがちだったこれら写真集・画集・図鑑・図録などについても、積極的に点訳に取り組んでもらえればと願っています。

表記辞典（増補版）が完成しました

情文のボランティア用の「表記辞典（増補版）」の墨字版（txt データ）と点字版（bes データ）を作成しました。

今回の増補版では、「点訳のてびき」や「日本点字表記法」の用例もできるだけ収め、また皆様からこれまでに質問のあった例や２校正であげられた例なども加えました。

見出語（仮名表記）は約 11,250 です。語例は約 24,500 ですが、重複している例も多いので実際は２万弱だと思います。

見出語の語頭には●を付しています（検索するときは検索語の前に●を付けたほうがいいです）。語例は【　】に入れています（検索するときは検索語の前に【を付けると前方一致検索になります）。

点字の記号類のうち、外字符（56 の点）は「外」、大文字符（６の点）は「大」、外国語引用符の開きと閉じ（236 の点と 356 の点）は「引」、つなぎ符（３６の点）は「＿」で示しています。その他は、点字の点の配列を［　］内に数字で入れています。

別の点字表記でもよい時は、それを｛　｝に入れて示しています。

情文８階の各パソコンに墨字版と点字版のデータを入れておきますので、ご活用ください。

「教科書点訳連絡会」セミナーのご案内

なぜ点字教科書は必要なのか

〈11 月 23 日　当センターにて開催〉

日時：平成 23 年 11 月 23 日（水・祝）　13 時～16 時半（12 時半より受付）
場所：日本ライトハウス情報文化センター4 階会議室
テーマ：「なぜ点字教科書は必要なのか」
定員：70 名
参加費：会員 500 円、非会員 1,000 円

【内　容】

12:30	〈受付〉
13:00～	〈挨拶〉田中徹二理事長
13:10～14:50	〈大阪府豊中市のケース発表〉
	発表者：大上直子氏（豊中市立蛍池小学校・教諭）
	蓮井庸介氏（同校・教諭）
	三上　洋氏（豊中市子供支援員・当会監事）
	辻岡　均氏（大阪市立視覚特別支援学校・教諭）
14:50	〈休憩〉
15:00～16:00	「点字学習指導の有用性」
	長岡英司氏（筑波技術大学教授・当会理事）
16:00～16:30	質疑応答
16:30	〈閉会挨拶〉加藤俊和理事

＊参加申し込みをされる場合は、直接、点字製作係・奥野までご連絡いただくか、メールで ｔｅｎｊｉ＠ｉｃｃｂ．ｊｐ まで「教科書点訳連絡会セミナーへの申し込み」と件名に書いてお送りください。

(C)WANPUG